

小精廬日誌
昭和十二年
十一月下旬

特別

44

1919

629

35

40

45

50

小治産日記

昭和十二年十一月

廿日

昨朝未だ夜と暮す加藤政と此記念合ふ
 辰木信兵衛と松田宗徳の申込と多々嘉貞常
 熟留後黄河軍甲の物事所々隔南の御成
 睡り過る午後散策再び高松屋の物事共記念
 辰資合と親

二十一日

日

所馬場造印も功本田秋清の紀念碑の押是
と銘ふ流す、故郷と筆す丸山雅也も未出所
澄旗中又も功、午後二時石浜第一の吉成武
臨正(芝場上寺)に筆す又故郷と筆す、故郷
所後くも未出、既河心山家のも谷川福平の
夜不入り雨

二十二日

雨今朝の秋報、三々、皇軍の自蘇州城に入る
朝来雅録と筆す、新橋に秋景味筆す、

棟原製

領し、中里後長田秋清の紀念碑、城林の
呪の色紙、林伯秋心の退耕荘の敷面二枚
揮毫、立川休庵も、小島と西洋葡萄と題し、日
本橋道(工書あり)在、瑞々亭、秋又と筆す、
す、馬場造印の簡す、武田其、中一の嶋者六
七枚押是、既、間筆とぬむ、

二十三日

新書齋

所、谷川福平、目録、中央公論社、も未出、北
新報の、為、中、押是、人と、既、中、代、所、を、揮

陰より午後散葉始生に到る夜に入りぬ

二十四日

晴、皇甲與錫を占領、馬場まで即ち来て、押巻
散紙成る武田寺中へ簡す、防兵渡智今朝解
陰、

二十五日

晴、相末神具を奉ず、久久一印を大に記す、全集
一冊、古抄展覧社へ大石川伸の收施の誌一冊

を多のてりやう午後雨降る、葉一上り散葉松風を
の時の渡西、大石川一列を記す、喜代四年と長
心と修理す、大工左官共々、竹筒板心取込のつき
款面を掃く、支那文彙二巻送給す、

二十六日

晴、朝未難治と書き、揮毫二十枚、武田連四
郎に交付、丹三協平、其、第一、第二、第三、金
四万、四万、出、午後散葉始生に到る、

信長

三十日

頃相末旅取と兼、皇軍房徳吉飲、五来、
の越、口、唯、新、記、と、接、ら、れ、り、
公、本、に、領、す、

十二月

一日

榎原義

頃、相末旅取と兼、皇軍房徳吉飲、
海軍、大員、動、為、志、午、後、時、に、乘、り、
此、迄、を、散、軍、不、令、夜、旗、を、文、子、
軍、人、今、終、く、先、中、く、長、保、義、
書、来、也、

二日

頃、皇軍の南京包圍成、
此、二、日、内、く、身、心、自、心、の、
一、来、の、大、日、本、印、刷、
二、人、危、の、中、入、り、来、り、
意、向、を、表、す、可、
切、密、の、押、進、を、

托さう如洋の古語詞飲の巻を貸付、名古巻を多く
リ、拙書も寄る、大炊の土師楠翁も来出、午後
日本橋迄散策

三日

晴、今朝七時日食、まよ印の病婦、六時の若と撤
し、先より長巻を移り、野屋内へ向ふともたう
加、森政士の地倉今に十四寄附、流し、葛巻、弘
来、活、園、二人来、海、舟、舟、舟、如、洋、巻、辰、三、
吉、浜、宮、地、之、研、究、出、版、記、念、祝、賀、会、今、十、二、日、に、行、な、す



書、名古巻を多くに押巻を寄る、午後散策、拙を
贈り、拙、時、言、ハ、ニ、フ、レ、ット、を、讀、み、

四日

晴、真、好、中、大、片、も、来、出、時、尚、と、勉、三、年、末、の、贈
答、と、巻、一、巻、一、巻、三、巻、巻、を、答、の、出、版、部
より二百回、集、巻、の、札、を、贈、り、来、出、園、下、二、人、の、つ、き、き、来
出、来、廿、日、集、巻、の、巻、を、出、版、部、の、宮、本、末、々、の、人、ら、を
つ、き、き、と、巻、一、巻、一、巻、三、巻、巻、を、答、の、出、版、部、
租、納、付、小、宮、安、子、ら、来、出、散、策、上、の、月、を、こ

おろまらり給ふ井上様も終つて入り来
家は板木の敷在りありと整理し一函に納む早
大出度部様主法合(廿二日)通牒到

八日

此余の定むるをぬめりて古山坊の形法利来因了
又其の土師補給も果出、形法を葺き午後
現形也、古山ありて大言海素引利来、早大も
改山柱を名に出来、遠近各陸去り自若漢文葉
園長を給ふ、五時江幸會の時合、終りて因

棟原製

中書院より井上増田と合了

九日

昨朝来家花の柘本を整理し、そのとき、後上
も江射を多く、且来活火處に一月心の陶三鬼
面の香合を贈り、神部紙に、もま出、坂の土師
補給も、坪の道邊葺、焼の飯、定を法ひ来
多、因了、来、多、遠、近、陸、去、り、自、若、漢、文、葉
軍、出、度、部、の、一、函、を、占、據、産、生、留、二、投、降、を、給
先、し、り、と、の、以、て、形、法、の、出、が、此、夜、由、日、文、庫

と扱へん星を五巻巻に飲む

十日

晴、園丁二人来り、星紙、度々、と廿四の目星、蠟山
並に、柱七十、欲今忘、年今の道、公、目、度、度、
照、陸、と、も、出、押、是、と、雷、の、あ、る、。公、人、の、星、に
応、い、二、三、枚、揮、。星、毛、才、一、部、の、欲、金、五、目、
引、出、す、。花、金、七、七、四、の、十、五、の、内、出、出、出、出、出、
欲、す、。欲、言、加、あ、あ、材、才、才、り、あ、と、贈、つ、も、志、さ
り、保、出、出、星、を、寄、こ、い、ふ、。

棟原製

十一日

晴、今朝、は、少、ハ、報、す、皇、軍、南、前、日、冬、候、つ、と、占、振
市、浙、戦、起、る、と、土、師、楠、孫、の、小、色、と、ま、る、。困
了、二、人、来、り、。高、田、久、敏、の、河、主、。小、林、儀、三、郎、
と、奈、良、法、を、贈、り、来、り、。形、は、後、友、吉、の、令
書、き、の、給、え、う、ま、い、と、三、下、り、。午、後、上、り、。送、散、葉、の、好
天、氣、す、甚、の、如、し、。

十二日

日

晴、市、山、房、と、家、谷、海、金、十五、目、到、来、。長、田、戒、三、郎、

物と賜ふ。市況は終日一時克となして
散策和上の市況を又噂して始ふ。切定後持船を
華す。夜芝の吃草船、川瀬一馬の法字歌の
研光成切と祝ふ。會を催す。余り午上祝辭を海山
小林備三郎に贈ふを友す

十三日

頃初来狂歌を華す。雅苑とカメウシの記者久保俊
大守の存せしむ即ち詠す。森田龜一の詩を讀
斯印がミニアケエーん辰観圓環を懸て来り
大隈侯邸欲帯人との正外一人来り。早稲の

三福ニ干喃す。賣却に附すへき。金石拓本目錄
を作つ約百件也。馬場内お病氣の為新報未次
大將内相とさす。南京城定全と占飲の公電刊

十四日

頃大隈侯記念銅像分賦分あり。紙亦状も各
一口入る。即ちいふ。我とカメウシ。日本書も友を伴
り。大隈侯の遺言。午後散策。山本博次郎。死云の
報刊入。今夜市況。南京城定の祝勝運動も
行い。歎乎天地に流す

尾刊来、土師楠福と来也、揮毫例と紙、夜に合

十七日

町、市島鉄大り、元五十公、淨念寺、寄附金四十
三、用書送、新河世隆の龍、味、代九、由、
十、美、送、上、弘、村、漸、地、土、十、田、内、外、
教、業、如、仙、を、贈、心、給、生、に、年、晴、し、と、ゆ、り、淨、念、寺、
漱、石、吹、の、抄、を、贈、り、外、出、中、品、酒、の、欠、取、り、
行、願、金、残、款、四、百、五、十、四、二、七、美、と、報、じ、
来、り、
又、は、南、京、入、城、式、の、完、日、景、を、報、じ、
庭、村、の、千、八、畢、日

十八日

町、本、同、大、権、
一、般、を、
野、本、
向、と、
限、
分、
十、八、
七、

貞吉、長澤於雨年、自若大峰親橋純白二冊本
間草庵、長谷川某流の粉本各一卷とあり、全
く大久保淑南の詩と十二首あり、字體本を認
る。

廿一日

晴、朝来雑紙を著す、長岡五尊社と、野老恭八の
の傳記を考ふるあり、馬場前内相死去、数葉丸じし
物を辨か、招信と稱して、市區鐵道を、未出、芝
田村町新橋附近の街上宿落地下鉄道工事の在斯

長岡

一夏燬破十戸の家と、燬く、偶に此所迄を、教宗中、火災の
跡を見る。

廿二日

晴、朝来時、パンフレット、秋廣、西午に到り、秋
の節外ハ、共在堂、換巻、と傳ふ、事ハ、去り
十五、全圖三府一選、十四縣、互り、一挙、換巻、と行
ひ、廿四、百名、及、あ、と、の、楠瀬、日年、と、未、也、難
報、と、著、す、西、茶、舟、吳、と、換、外、土、田、亦、大、中、と、梨
栗、刺、未、改、界、世、未、社、と、あ、お、を、貯、り、未、也、

廿三日

晴、早朝、及邦の繁盛を以て注意を以て、丹土土
田の海を去り、早大出版部にて行幕を刊す。
本朝無敵の言、古語互尊社刊海を以て、思次
展を、爾し、四の十放令、思之、所新の、午後走七
宗家、嵐者の祀はしく物を齎す、所行、く、重
柄部来訪、午後後臥せ、互尊方の信を讀む、宛
旅、送、へき、海、昔、教、函、を、購、り、大、娘、夫、吹、草、を、以、て
茶、品、刊、来、杉、浦、翠、子、を、以、て、未、出、日、の、史、の、編、を
の、短、歌、の、上、主、義、を、好、く、来、り、

櫻原

廿四日

微雪、本日、湯、分、石、集、候、口、飲、ま、す、未、去、金、邦、未、金
一、五、二、床、を、離、れ、の、如、長、を、雅、に、筆、す、塩、深、昌、人
より、大、戸、納、豆、利、来、在、及、紹、り、を、以、て、各、所、金、殘、額
三、万、二、千、の、三、十、八、と、報、じ、し、あり、河、亦、あ、後、下
り、物、を、短、く、し、古、道、通、自、尊、歌、集、度、の、年、長
酒、を、飲、み、瓜、印、を、追、り、各、所、の、以、て、心、を、合
轉、り、午後、寝、ゆ、又、別、々、を、以、て、午後、刊
す、

二十五日

大正天皇祭

雨收凡、皇軍の抗物城を欲、本林賜是相来後、改
上弘光母の注釈を施す、塩澤宮より海邊と名す、今
由古原夏島自心のもつ銅造文の反也と稱す、
午後梅嶽日年三城と称す、所別、
る五十點を親の、早急流作の計別、
林橋を贈り来す、
。

二十六日

日

時、相来社殿を築す、早急流作の遺蹟を予状

櫻原製

と名す、新病を田の里より梨果一辺相来、
七も、至五十四家用の、
の八月廿、
注文の切餅一為り列連

二十七日

時、園丁来り松の防雪繩を給ふ、
塩梅粉もる、
贈り、
時、向洋濱を後、

移す。昔の皇御清南の鑑。

二十八日

唯此法双雅三方の讀み甚具くことあり。御之余の
隨筆、空の如く、需の如く、改上弘花あり。注射と
施す。後之威、眞く、字をくき、左稱を著。此時
を費す。午、故出、物、如、世、の、如、精、の、仁、清、心
短鏡の玩具を、辨、の、口、入、上、ん、を、珍、と、り、以、り
化、る、を、葵、の、徽、号、鏡、身、を、身、う、仁、清、の、印、也
あり。大ききと八寸許、を、を、初、に、短、鏡、文、鏡、也

漢書

多家花と書、徳川家のお飲よふ、時、
極、取、弄、に、是、也。

二十九日

唯、初、末、多、稱、を、補、西、日、に、双、雅、を、三、字、を、古、の、如、
う、物、を、如、く、書、る、回、の、如、城、宮、と、時、向、に、向、す、回、を、日
お、と、定、ま、る、大、徳、回、之、如、く、と、花、の、目、如、如、
其、の、部、を、如、く、書、る、大、賀、一、の、如、女、と、カ、
日、は、又、如、く、し、は、打、を、如、く、と、あ、の、常、井、と、保、
鮮、也、と、如、く、書、る、京、福、と、双、雅、三、方、の、如、也、

三十日

町、村松武美より新潟市長就任の挨拶状の
う、第一杯の祝金三百五十圓引出す、栗林方委
、湖山と名なり、又双雅と名、簡より十一時出湖三
越、物を贈り、口不言を三顧、又、白の峰、く
、菓子と贈り、以後大久保を、茶寮を贈り、夫
、午後湖を、得て雅法、湖後、時を移す、吉田
和男、飯茶、亦、も来、也、五、奉、新、在、の、待、福、志、世、衣
成、の、信、在、於、来、の、物、と、贈、る、

和男

三十一日

時、七十八歳の、こと、も、言、も、て、お、人、と、す、敢、て
年、も、食、も、あ、ら、ざ、ら、ん、無、事、一、歳、と、い、ふ、と、
即、ち、の、仕、合、も、毎、年、の、昇、進、入、自、祝、す、る、
例、に、あ、る、。、部、主、の、市、中、の、め、め、と、娘、を、伴、ひ、て、
づ、丸、山、に、別、り、元、々、丸、山、と、中、央、元、一、三、三、の、
河、の、地、を、道、通、り、謝、け、た、る、を、以、り、て、ま、ん、入、り、て、
ふ、岳、梅、さ、ら、し、ま、し、ま、つ、て、お、前、と、い、ふ、集、会、
自、動、車、の、乗、り、伊、勢、丹、公、事、に、酒、飲、く、一
二、物、を、贈、り、て、油、の、利、と、字、中、中、振、り、物、り、

中より七勝いくさつと軍の事業の爲めゆゑ
聞いあつて是を案よむと方とせりなり、是のむ者
物は此の西の由ふに二十日家用交付方
者三月中に物を賜ふ

除夜家礼の事、食膳献進するも改りず

四 雜物類

平 鴨、まごころやうき茶等

坪 豆腐、麩卵、こしじん等

酒の古物 カバの子 納豆 コハダの味噌

除夜、鐘を鳴り放す、近年の例也、今夜の鐘を鳴らすは、

つ真山寺の鐘聲、とてゆく夜をいかに刻愛す時をも此の
形も十二年、日記集

家用仕掛約八万五千人也

以下

〃〃丁

白紙

昭和十二年丁丑起長橋

一 本年七十の年と仰るゆゑ七十才の
新の病の白服も揚公の保養中

一 二月三日熱河の海防の末七人を
道邊の墓を度し即ち物宅

一 蕪麻出版の金の危業軒船を
十数家に領つ

一 道邊者法出版し其の是を
一 昭和十二年の白文と自批を

棟原製

宗の事

一 昂長室に降く七位下り台所家相より
ずと云ふのよあり取り毀つ

一 早中ニ孫授起う一月十日只社より
臨云

一 内子三合五層の分使証云一千日も晴ぬ

一 一月廿三日内閣從許様、後継内閣從儀の
大命宇恒大将とありて流者し大命
又も其鏡十中一大約あり但儀成を濟分
中の流令と証み解最とりよ

榎原製

一 雜傳みきだの巻首に列人のみなる事あり

一 御上の名刹し寶寺火火上回修佛亡ふ

一 早大出身泉御夜談と記えん不忠池畔の渡
の家に飲む

一 宗家の長男龜三郎壯時狂疾を病み、年未だ
七歳神の家へありし家六十六歳うゑ死云

一 坊内道達の三年志法安も世傳双許合巻
み臨座す

一 和泉文三死云考典五十四冊の廿八集儀と元
子も遺す

- 二月十七日の余の誕辰に長城宮と神田の治作に
開く今更井村名出席会を春城園法を領り
- 旅誌みさおの巻頭言に「碑厄」の一稿を寄す
- 讀書のり「言行録を讀む」の一篇を投す
- 改進黨の雑誌「研究」に「梅」の一稿を投す
- 雑誌「江戸と東京」三月号に「教養中の閑耳目」と
投す
- 書苑「劇刊部」に「慶應七のふき」と寄稿
- 山村一太郎の「肉忌」に「遊地」と寄稿
- 金澤の同人社に寄す

榎原

- 書志「骨董雑誌」に松浦北海の「遊」を録す
- 寄す
- 放送局「十五分間」に「放送を囑る」と石山
「上」の「説」を放送す
- 大賀一平（理系博士）大隈三井子の親友で、学院の
の確立を始め、余を招き、余を招き、余を招き、余を招き、
助力し、皇都大丸を以て西陣の御元を調査
す
- 新居の二萬の記念の社の上、昭和快を推
行すること、祝詞を寄す

一 四月二十二日早大出版部より金の銀る金残銀四
 千九百六十五兩七十八匁と贈り来り銀紙
 一 奉来書道流の雜紙に、名家と尚書集の思ひ出
 と云ふ事
 一 早稲田大なるお多しの、銭の銀鍊に做入の一箱と授
 一 劍利雜紙御土関東に、余の初めて見れ東京
 の箱と云ふ事七次より、八万兩の箱と云ふ事
 一 仰里お多しの懸まきるる板の為額面と
 押まき、夫をわらわの為の日記

棟原製

一 作内小本河、紅葉山への句碑を建つ
 このまゝ其側より、田所の休憩所と建築の
 奉り、暖かき亭にて紅葉亭の三子殿を
 拝見
 一 長井雲坪の碑とわらわ白山公園と建つ
 奉り、碑字と押 立元
 一 録肝録印税の通る同録紙
 一 新内田麻未録紙、傳真の事、四月末
 東京より、一軒を賃借して移る
 一 新儀より、堂を成化念として、銅板の烟巻

竹匡を贈る未の

一 早大教授牧野清次郎の死云

一 五月十二日小入江成一死云

一 五月十二日英帝戴冠式より秩父宮日記所載
代々も参列朝日堂の飛行機神風式に
先づ訪英の成切

一 五月十九日新橋烟草の需に急いで不滅の火
の二行と投す

一 五月十九日皇宮内閣に遊ぶ

一 五月十七日三宅雪嶺の喜壽祝賀の事

棟原製

臨志

一 大政信託の山林傷を三十年前余の母
証す七山日記の二就職して今も二山を
記念の事と牙能の山を贈る 五月廿日

一 五月廿二日早大臨時助成に任じし事と
臨志

一 高島和夫の死

一 先師星野博士の追憶法を記し雜記書
志略の事

一 五月廿五日田中光賢の追憶法を記し雜記書

を聖書

一 六月朔雜活書道に余の名家手簡菴集の思出を記して寄す

一 所内の紫礼に御輿新油よりき五十四字附
一 林内閣秘辭職世近衛公後継内閣秘職の天命を拜す

一 金子馬次急死

一 御里北斎齋に於ける新井御川治の事、河原
野川逆流防止並開門の工事完成迄
開門の儀より治の記念碑も遠くを臨み

棟原製

但合巻記為地方事務及寺松福堂より余の

撰文と相考をも書め奉るる日

一 報知の多の月曜迄若樹の市産の二篇を
寄す六月十日

一 近衛安山公進徳の二篇、治次大正史蹟に
寄す

一 開、乗し、預、譯、語、百則を録す

一 七月三日、行、行、校、友、と、臨、也、

一 七月四日、友、友、の、身、順、令、と、相、え、ん、お、寄、校、と、松、也、

一 福の撰、撰、と、寄、し、懸、祝、會、と、臨、也、

一月五日 天皇宗家宅を訪ひ新井御川關係者の
安ゆきを詔ふ、探査を以て松ヶ崎に上陸せ
しむる由く。

一 宇垣大将宗家宅へ来りし日、同日宇垣大将
の兄宗家へ赴き、同夜大将と共に福地海
へ舟を渡へ、宗家へ宿し、其の夜

一 久江村へし、遺物として宗家の柩と黒根
の幅を贈る。

一 出陣前、中元、貳万圓利未、

一 日支事、夏起、七月廿日、皇軍砲門を開く

榎原製

一 新井御川砲台砲、初稿成る、七月廿日

一 表姑、兎長田秋清の「福」と政界性未純、其の
す

一 七月末日、日本女子高等学院の集會に臨み、其
年期の経過を述べ、其の

一 東京日々、新夕の號、其の日に、隨筆「四命を以て
す。

一 泰東書道、其の號、其の日に、長寛の字紙、就て
の二命を以て、八月、其の

一 八月一日、印治の執筆と、其の三十枚の系

移成の既刊誌集の印紙と合せんハ一冊
 とうりすと得べし、楠瀬日年の勸誘で因の
 冊其協平早大在名の中病入改一ヶ月
 涉の平の家公餅甘地果瑞の世話を
 あり
 一 任友館の半込支店、一萬圓と七千圓二
 口定期預金六月末期限の満八月十
 二日漸やく切換、更く六月末(未年三
 月十日期振)預け入の利子の高座預金
 二差入の八月十三日記

榎原製

一 日支事 変換大上海と交戦
 一 八月廿三日夜防空演習を行ふ
 一 八月廿八日新井御川治お産の稿を新
 込の組合におす
 一 九月三日臨時議合を召集合の事を書件
 費井徳田渡決
 一 坊内道運に記念小銅像九月十日坊内家よ
 り宛てて送す。て余の抱き電令回の原
 の也也
 一 九月十百と二三の版病をももの其る

熱病誌

九月十考より十九日迄都府防兵演習を行ふ

九月廿四日皇軍保安を断る

十月九日治外館控置半年の事と成る四十
八字款十六行の案数と成る也

後書致多し、甲四の讀出レシツシ「口會を
書す」十月十日

十月十一日、以て、故野原如洋の追悼會
を催し、早上演説と成る

榎原製

心華社一冊の河を流し終る、念ふの情と物
ぬいさよの也

十月廿五日、磯中支母ハ十三歳、其を此去、其の
姉を僅かゝる、此二人の同胞ハ、スエ

古田家、若干の遺物を贈り来る

郷土関系雜誌、臨深子の近懐文を寄
す。

十月二十日、皇田大場鎮を以、鎮滿都祝
勝行列を行ふ

政府九國會議不冬加を中、此の宣明す、廿日

一 上田萬吉 桐島像一死云

一 長澤松雨 大久保湘南の巻 詩を編輯出版せんとして序を余よせしむる即ち淑斎近侍を著して序に代ふ

一 安田文庫 古法字版の研究と題して歌一馬の條著の巨冊と余を以てしむる即ち淑斎近侍の氏印しりしものも記念の爲の言ひを以てしむる即ち古法字版の條別を以てしむる即ち淑斎近侍の條とすす、右二つも安田文庫より油物とす

榛原製

一 日獨伊防共條均讀所成り十一月七日市民提快行列と云々 祝意を表す

一 市山房 支田斎の大事名辭典を改版せんとして 編纂の時思ひ出を著せんことをせと云、即ち録して示す

一 大隈養 本年生誕百年に下る時向の早大ハ祭典と題して名辭典の條の桐島像の分布合と題しての著し、又右を一死云の條を附す

一 同窓友入石海 一死云 十一月十日

一 長田秋濤の紀念館を建つる奉り其祭

起入るし碑字を神臺せんことを請ふ其囑
こゝろす

一 皇軍連戦捷上海既ニ皇軍ニ降ル南京
遂ニ陷落日本政府國民政府非認も考
ゆす

一 本年一人の爲りし拙字を書す殊も多し、身
條暢なるに上らん條暢を云する、先後の方
働る、山々漸やく宿債を一掃す計月上
他人に貸し置き等前長尾漸すぬき終債を
へて昂夫嫌と云る、いふは、因り夫來の假也

と撒す

一 先來閑暇多く朝起きて雑報を著す
こと例として紙のよの概報隨筆の材料
也本年の雜報下且雜記といふ、九冊成
一 毎日運動のせむ散策、出入り又す酒飲し
正午の食の概報毎々取らば、一ハ痛婦の
房を省かん爲め也

一 弥考池の念ん痛し、本年多く通刊を
て讀む時書に關する、隨筆に、他家
らも寄稿の也、七所あり

- 一 毎年一冊の逸業を刊行することを例として、こゝと一回難時に逢ふるが如く、或る時及び何らのあるとき刊行を乞ふなり
- 一 本年多くの集會に臨み、昨比毎月二回紅雲社に於ける友人の晤合に必ず出席せしむるのみ
- 一 十二月十二日南京城臨處
- 一 大日本印刷會社本冬季配中八分予君義會六万七千九百九十枚、内子合万四千八百三十三枚也
- 一 五十二日中津會寺補助會四十三日納め了
- 一 旅とカマウの新年節、味那の日本新史

榎原製

蹟を行へしの一又は定あり

- 一 本年客館を考へたに、田中少少、糸富の所の資料、新典大言海、また一、澤下の大下、た、金、川瀬一馬の古流字版の研究、持記せる位、新井柳川流の碑、撰出、淋痛、織合、万、同、日、刊、東
- 一 委印、附、す、く、家、是、金、石、拓、本、百、面、の、目、録、を、作、す
- 一 早大出版部の忘年合も十二月廿二日、早大、家、こ、ひ、ま、く

一十二月廿七日前内務馬場銀一五五氏改定の西村
丹次が氏五共ニ知人也

一十二月十五日共産黨大検奉り名三及廿二日解禁
新夕那外出り

一十二月廿七日皇軍法南を占飲

一 双権方の福山漫興の節の隠書と字の
十二月廿七日

一 本年の生活状態前年と変化あり
徳退後月収
ハ或しと異く、貯金七
毎月要請して家計を
亦
まゝえり、貯金の日
と減るのや、本年幸

榎原製

早大出版部より金の慰問金
五千圓
受取し得るを以て、
家計を亦し得る
帝収入の早大にも受く
と年金月利
九
万十數圓、印刷機
能南年二期六萬十
圓の二倍出財部
と各の貯金四萬圓
あり、臨時収入
幾千円も本年の概
算の貯金として
銀行に預け入れら
る。尚ほ才一報り
に定期預金七千
七
千圓あり、未
だ之ん入手も
の味さるが仕
合
とす、勿論借
金の一減る

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

榎原製

以下全て

白紙

